AICHI TRIENNALE 2010

2010.8.21→10.31

あいちトリエンナーレ2010
開催報告書

目　次

Ⅰ　主催者あいさつ…………………… 3

Ⅱ　芸術監督報告…………………… 4

Ⅲ　開催概要…………………… 7

(1) 開催概要…………………… 9

(2) 企画体制…………………… 11

(3) 主な会場…………………… 12

(4) 実行委員会組織図…………………… 13

(5) 開催までの経緯…………………… 14

Ⅳ　開催記録…………………… 17

(1) 企画内容…………………… 19

①主催事業…………………… 19

②共催事業…………………… 23

③普及・教育…………………… 24

(2) 参加アーティスト…………………… 27

(3) 主な特徴…………………… 30

(4) 会期中のイベント･プログラム…………………… 33

(5) 来場者の状況…………………… 40

(6) チケットの販売状況…………………… 43

(7) 地域との連携…………………… 47

①共催事業…………………… 47

②芸術系大学等との連携…………………… 50

③並行企画(パラレルイベント)…………………… 51

④パートナーシップ事業…………………… 52

(8) 県民参加の状況…………………… 58

①ボランティアの状況…………………… 58

②サポーターズクラブの状況…………………… 59

(9) 会場運営・案内サイン…………………… 60

(10) 広報の状況…………………… 62

(11) グッズの作製・販売…………………… 66

(12) 出版物（ガイドブック･カタログ等）…………………… 68

(13) 実行委員会の収支状況…………………… 70

(14) 企業等からの協賛・協力の状況…………………… 72

(15) 県・名古屋市による補完事業(緊急雇用創出事業基金事業)…………………… 73

（参考）県･名古屋市によるトリエンナーレ補完事業の内容…………………… 74

Ⅴ　アンケート結果等…………………… 79

(1) アンケート調査の対象…………………… 81

(2) 来場者アンケート結果…………………… 82

(3) 関係者アンケート結果…………………… 94

(4) 文化芸術関係機関等アンケート結果…………………… 101

(5) 経済波及効果及びパブリシティ効果…………………… 109

(6) 専門家意見…………………… 110

Ⅰ　主催者あいさつ

Ⅱ　芸術監督報告

Ⅰ　主催者あいさつ

ごあいさつ

2010 年 8 月から 10 月にかけて、愛知・名古屋から世界の先端的な現代アートを紹介する国際芸術祭「あいちトリエンナーレ 2010」を開催しました。72 日間の会期中には、57 万人を超える多くの皆様にご来場いただき、愛知で開催した初めてのトリエンナーレは盛況のうちに無事終了することができました。

あいちトリエンナーレは、経済面において、日本と世界をリードする一大拠点であるこの地域から、文化芸術面でも日本や世界に貢献していこうと、2008 年 3 月に基本構想を発表し、以来、地元の自治体、経済界、報道機関、学識経験者による実行委員会を組織し、地域をあげて準備を進めてまいりました。

第 1 回目となる今回は、「都市の祝祭 Arts and Cities」をテーマに、世界 24 の国と地域から 131 組のアーティストの作品が愛知に集まりました。中心となる現代美術展では、愛知県美術館、名古屋市美術館といった美術館の中だけでなく、歴史のある繊維問屋街の空きビル等を会場とした長者町会場や、旧ボウリング場を活用した納屋橋会場など、まちなかの様々な場所を会場としつつ、愛知・名古屋を代表するシンボル的な場所であるオアシス 21 や名古屋城では、街ゆく人にも楽しんでいただける大規模な作品展示を行いました。

また、こうした現代美術作品の展示だけではなく、愛知芸術文化センターのホール、ギャラリーなどやまちなかの空間を利用して、多彩な舞台芸術公演やパフォーマンスも数多く実施いたしました。更には、愛知芸術文化センターでは、次代を担う子どもたちを対象とした「キッズトリエンナーレ」も開催し、多くの子どもたちが会場のあちらこちらでトリエンナーレを楽しみました。

あいちトリエンナーレは、今回を初回として、以降 3 年ごとの開催を目指しています。このたび、初回の開催記録や来場者の皆様、関係者の方々へのアンケート結果などを内容とする報告書をとりまとめました。今回の成果や課題をきちんと踏まえ、回を重ねるごとに、皆様により一層親しんでいただけるトリエンナーレとしていきたいと考えております。

最後になりましたが、あいちトリエンナーレ 2010 の開催にあたり、ご支援とご協力を賜りました全ての関係機関、並びに関係者の皆様方に対して深く感謝申し上げますとともに、今後ともあいちトリエンナーレへのご高配を賜りますようお願い申し上げます。

平成 23 年 3 月

あいちトリエンナーレ実行委員会

Ⅱ　芸術監督報告

あいちトリエンナーレ報告

―皆様への感謝をこめて―

国際展における芸術監督の主たる役割には、基本コンセプトをたてること、それに基づいて参加アーティストと作品を選択すること、また会場を決定し展示や公演までの責任を持つこと、プロジェクトの内容について、スタッフや参加アーティストは当然ながら、市民、行政、議会、企業、ジャーナリズムや専門家の理解を得ること、カタログを始めとする様々な印刷物や広報媒体に対応することなどがある。その任をよく果たし得たかどうかは世の評価に委ねるしかないが、正直なところを言えば、芸術監督の二年余りは、上記の仕事にまつわって不可避的に発生する大小のトラブルの処理に明け暮れる日々であった。綱渡りをしながらも無事に会期を終えられたことを、多くの関係者の方々に感謝したい。

私が就任する以前のこのプロジェクトは「あいち国際芸術祭」と仮称されていたが、正式名を「あいちトリエンナーレ」とすることにしたのは、愛知を国際的な発信力、求心力を持ったアートの基地として位置付けるためには、何よりもまず継続的なプロジェクトであることを鮮明にすべきであると考えたからである。トリエンナーレと称するからには、何としても一回目を成功させなければならないし、中途半端な内容では継続に向けての支持も得られないだろうから、私たちは重い責務を自らに課して出発したことになる。

さて「都市の祝祭」を今回のテーマとして掲げたのは、美術館などのアートの専用施設ばかりではなく、都市そのものを会場とし、斬新なアートとの触れ合いによって、日常的な生活の場所をわくわくした非日常的な空間に変貌させることを意図したからである。長者町というアンチームな雰囲気を持った繊維問屋街を主会場の一つに選んだのはそのためだが、ある意味では身勝手でもある私たちの申し出に街の方々が快く応じて下さり、全面的に支援していただくことができたのは、何とも幸運なことであった。都市の祝祭とは市民のための祝祭であり、市民による祝祭でもなければならないからだ。

祝祭性に加えて、私たちは“先端性”と“複合性”をも基本コンセプトに据えることにした。三年に一度開かれるイベントであるからには、先端性、つまりその時々の最も新たなアートの息吹を紹介することは自明の理のようなものであろうが、複合性はこのトリエンナーレならではの性格であると言ってよい。

美術ばかりではなく、いわゆるパフォーミング・アーツの分野をも含めようという方針は、まずは愛知芸術文化センターという、ギャラリー以外に三つの劇場をも合わせ持つ施設を最大限に活用するという条件から来ているが、単に美術展と劇場公演を並行して開催するだけでは既存のジャンルの加算に過ぎない。それぞれのアートの領域を専用施設に囲い込むのではなく、より融合的に捉え直すこと、相互的な関係を積極的に切り開くことができないかと私たちは考えたのである。具体的に言えばギャラリーの一部を常時、パフォーマンスが行われているスペースにし、劇場でも美術的な要素を含むイベントを多く取り上げることにしたのだ。またアングラ演劇の時代から前衛的な活動を展開してきた大須の七ツ寺共同スタジオには、美術家と演劇人とのコラボレーションのプロジェクトを組んでいただくことを依頼するなど、リスクを承知で今までにない試みに踏み込んだのである。

もちろん言うは易しで、現実にはさまざまな困難を伴う作業であった。キュレーターとプロデューサーはまったく性質の異なる仕事であることを思い知らされたと言ってもよい。美術では同一の作品を会期中、常時展示し続けることができるが、パフォーマンスではそうはいかない。スケジュール管理の仕方が異なるし、照明や音響の技術も似て非なるものである。いわば空間芸術と時間芸術を成立させる方法の本質的な違いに直面することを余儀なくされたわけである。それでもどうにか当初の意図を実現することができたのは、アーティストやスタッフを始めとする関係者の方々が、こちらの素人的な発想に興味を持ち、創意工夫で無理難題を克服して下さったからで、まさに平身低頭の思いである。

さらに大きなリスクを伴ったのは、壮大な規模のスペクタクル作品の制作と公開であった。草間彌生のオアシス 21 の「水の宇宙船」を使った華麗な屋外インスタレーションは台風などへの備えが必要だったし、蔡國強の“爆発絵画”の制作はぎりぎりのところで関係当局の許可が間に合ったのだが、体育館での火薬の爆発を受け入れ、学生たちもボランティアで参加してくれた名古屋芸術大学の“蛮勇”には、敬意を表するしかない。池田亮司の壮麗な光の柱を夜空に立ち上げる「spectra［nagoya］」は、名古屋城という理想的なロケーションが決まるまで、場所探しが難航し、一時期は開催を断念しかけたほどであった。西野達の巨大な「愛」の字のイルミネーションをクレーン車で吊り下げた作品は、最終案に到るまでアーティストに何度、プランの変更をお願いしたことか。これらのプロジェクトが、危機をはらみながらも、すべて実現に漕ぎ着けられたことは、いま白状すれば、奇跡的のようにすら思える。

それにしても準備と会期のすべてに当たって、ボランティアの働きは大きかった。彼ら、彼女らの情熱によって、むしろ私たちの方が勇気付けられたのである。その他、サポーターズクラブ、ベロタクシーや草間カーの活躍、協賛して下さった企業や団体、議員の方々など、多くの力の支えがなければ、あいちトリエンナーレの成功はなかったであろう。

詳細な報告は本書の各記事に譲ることにするが、この二年余りの関係者の奮闘の記録は、まさに“トリエンナーレ戦記”ともいうべきものになるはずである。その戦友たちに、また温かく見守って下さった神田真秋前知事に、そして何よりも市民の皆様に、改めて心からの御礼を申し上げなければならない。

あいちトリエンナーレ 2010 芸術監督
建畠　哲